

ている。その根治術式として、可能な限りの胆道拡張部切除と胆道再建術が主流であるが、肝内胆管拡張例には肝葉切除も考慮されつつある。我々の経験した2例の先天性胆管拡張症の手術例について検討する。

症例(1) 16才、女性、黄疸、右季肋部痛にて、胆嚢外瘻での減黄後、先天性胆管拡張症と診断され、嚢腫部分切除、嚢腫・空腸吻合(Roux-Y)が施行された。

症例(2) 24才、女性、11才の時、特発性総胆管拡張症にて嚢腫十二指腸側々吻合術を施行、12年後、右季肋部痛より上行感染が疑われ、胆嚢・肝外胆管切除、総肝管・十二指腸間有茎空腸間置術を施行、さらに間置空腸短縮術、広範囲胃切除術(Billroth II法)が行なわれた。2例とも経過良好であるが、拡張した胆管の一部は残っており、今後、残存嚢腫からの発癌・結石・炎症について長期 follow up が必要と考えられる。

4. 溶血性黄疸を呈した胆嚢捻転症の1例

武田 信夫・高野 征雄 (秋田赤十字病院)
丸山 明則・山際 岩雄 (外科)
川島 吉人

胆嚢捻転症は、Wendel (1898) がはじめて報告して以来、欧米で300例、本邦でも100例近くの報告がある比較的稀な疾患である。今回我々は、溶血性貧血、黄血を伴う急性腹症で発症した胆嚢捻転症の1例を経験したので報告する。

症例は74才、女性。腹痛、黄疸、嘔吐にて発症。入院時検査にて RBC 198×10^4 , WBC 7,800, Hb 7.8g/dl, Ht 23%, Plt 5.9×10^4 , T.B 14.3mg/dl (I.B 9.5mg/dl) LDH 2082, GOT 27, GPT 32, と溶血性貧血を認め腹部エコー等にて無石性胆嚢炎と診断した。保存的療法にて溶血性貧血の改善を見たが、腹痛は改善されず、手術施行し、胆嚢捻転症による急性虚血性胆嚢壊死と判明し、胆嚢摘出術を施行した。本例は Gross 1 type の遊走胆嚢で胆嚢管部で反時計廻り180°捻転し、周囲に限局性膿瘍を形成していた。胆嚢捻転症と溶血性黄疸の関連については、D.I.C. 及び赤血球膜異常等による溶血ではなく胆嚢捻転による胆嚢動脈絞扼による赤血球破壊による溶血性黄疸が併発したと考えられる。

5. 植物の茎の断片を核として総胆管結石を生じ、Pneumobilia を呈した1例

小林 英司・原 滋郎 (県立小出病院外科)
榊原 清
工藤 進英 (新潟大学第一外科)

最近、当科において植物の茎の断片を核として総胆管

結石を生じ、pneumobilia を呈した一例を経験したので報告する。

症例: 76歳、女性

主訴: 右季肋部痛

既往歴: 昭和43年他の施設にて胆のう摘除術。

現病歴: 昭和59年4月上旬より右季肋部痛あり、近医受診し黄疸を指摘された。4月5日当院内科入院、腹部CTにて総胆管結石及びpneumobiliaが認められ、ERCにて総胆管の拡張と結石が認められた。5月10日手術の目的で当科転科した。

手術: 5月21日総胆管載石術、T-tube ドレナージ施行。術中造影及び胆道ファイバーでは、乳頭部の異常及び瘻孔は認められなかった。摘出結石は、泥状のビリルビン系結石であったが、核となった物質は、維管束植物の茎の断片であることがわかった。

以上、植物の茎の断片を核とした総胆管結石の一例に文献的考察を加え報告する。

6. 新潟県における胆道癌調査結果

加藤 清・赤井 貞彦 (新潟ガンセンター) (外科)

1972年のWHO死亡統計資料によれば日本人胆道癌死亡率は31ヶ国中男子1位、女子9位の高率である(富永)。日本国内での地域分布をみると関東北部から東北地方にかけて高く、中でも新潟県は男女共死亡率第1位である。この胆道癌多発地帯である本県においてその実態調査を行い県内における多発地域を同定し、更に他のリスクファクターについての疫学的調査を行えば、胆道癌の予防及び早期発見の契機を得る可能性も考えられる。

県内100余の外科診療施設にアンケート調査を行い胆嚢癌177例、胆管癌184例、膵癌234例が集められた。性別では胆嚢癌が1:2.4と高令女性に多く、年代別では毎れも70才代が最高を示した。各疾患の居住地による分布、人口10万当りの手術数など昭和57・58年2年間の集計結果を御協力いただいた諸先生方への御礼をかねて報告する。

7. 外科治療を必要とした急性膵炎

片柳 憲雄・和田 寛治 (長岡赤十字病院)
小林 清男・山下 芳朗 (外科)
草間 昭夫

急性膵炎は膵臓の出血、壊死、浮腫を主体とした局所の病変でありながら、重症になると重要臓器に障害を及